
星色鹿鳴館

雨凪くじら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星色鹿鳴館

【著者】

Z8033F

【作者名】

雨風くじら

【あらすじ】

君とふたたび出会ったのは、時間に置き忘れた場所

君の隣に、いつでも僕の姿があるよ！」

かくん、と寝返りを打った少女の頭を青年は撫で続ける。

真昼だというのに締め切られた、西洋風のやたらと広い部屋。照明も最低限まで落とされた部屋は薄暗い。

はいな！

青年は眠る少女の頭を幾度となく優しく撫で緑に、
寝返りのせいで乱れたドレスを直してやり、邪魔そうにしていたヘ
ッドドレスも外す。

頬の薄桃色の肌を二二一とおしゃるやうになぞり、やうに青年は撫で続ける。

そこは、少女と青年だけの、小さな小さな子供部屋

nicht
i

放浪癖、とまではいかないが。

橋本春人にはほつつき歩く癖がある。高校2年生の春休みの初日、3年を目の前にして初めて受験が間近に迫つてくる春となつてもいまだにその癖が治らない。

学校までは電車通学をしているが、途中下車なんていつもの話、ひ

どい時は全く違う路線に乗つてふと田に留まつたところで降りたりするものだから門限が全く用を足さない。

酷いときは朝帰りも出来ず、仕方なく野宿しそこから学校へ行つたこともあるという伝説の持ち主である。

学校終わりにそんな少年が降りたのは、やはり最寄り駅ではなかつた。

そこは最早無人駅のようなさびれた駅だつた。**守槻駅**、といふ。見回すとどこにも降りる客の姿はない。突き抜けたような青天井に反射するアスファルト。

久しぶりだ、と春人は思わず呟いた。

カバンからデジカメを取り出し、シャッターを切つて満足そうに微笑んだ。

申し訳無さそうに佇む小さな改札を走り抜けるように抜けると、一応舗装はされている一本道が出迎える。

最早過疎地域といって差し支えは無いだらう。

色褪せた赤や青がちらほらと新緑の中に見えるのはどうやら人家のトタン屋根らしいが、どう見ても誰かが住んでいるような気配はない。

埃を被つた時間が山積する廃屋同然の家。ガレージに放置された小さな子供用の自転車や、網の破れかけた虫取り網、底の空いたポリバケツ。

それらに近付いては少年はシャッターを切つた。

一通り撮り終えて道なりに歩くと先は分かれていた。左はそのまま舗装された道路が続く。右は砂利道で踏み固められただけの道のようだが、両側から木が合わさつてトンネルのようになつていて、多分駅から見た風景からして左が集落に行く方向だと推測出来たので、春人は砂利道の方を迷わず選んだ。

トンネルが途切れると、ひらけたところに出た。そこからは蛇行した砂利道が続いている。

興味を引かれてその先を辿るが、どこかおかしい、と感覚が訴える。

「道だ、と気付くまでに少し時間がかかった。」

確かにただの砂利道だ。それなのに手入れをされているかのように雑草が生えていない。その上、邪魔な小石も道端に払いのけられていて歩きやすい。

人が住んでいるのだろうか。

そんな疑問もふと胸を掠めるが、まさか、と振り払う。

いいかげんうねうねした道の大きなカーブを回りきると、突然道が直線になり、大きな建物が姿を現した。

「うわ…」

声が漏れる。

家というより最早邸といった風の酷く大きな4階建ての洋館。さながら明治時代のような豪華絢爛さだ。

やはり手入れはされてはいたが、ここにも誰かが住んでいるような気配はない。大仰な門の鉄扉は鍵が掛けあつたが錆付いているし、表札も無く、幾つもある窓は全てカーテンが閉められている。

春人は溜息をついた。

こういった場所が見てみたかった。忘れ去られた時代の堆積する、美しい場所。

虫取りに夢中の幼い少年のよつこ、歩き回っては網の代わりにレンズをかざす。

門柱のガーランドに、門扉の口口口様式のよつな曲線の装飾。視界に美しく切り取られるままに、何枚も何枚も。

「困りますねえ」

振り返った瞬間、痛みとともに意識が途切れた。

春人が最初に認識したのは頭部と頸部に走る痛みだった。
無意識のうちに痛むそこをさすりながら目を開ける。

「……ええ？」

間抜けな声が漏れた。それもそのはず、先程までいた場所ではない。

「……何だこれ」

そこはかなり広い部屋だった。

だが春人が今寝かされていたベッドと部屋の中央に置かれたテーブルセット、それから備え付けの洗面所、一枚のドア以外は何も見当たらない。

換気扇が回されているような音がする。

慌てて周りを見回すが、ベッドの下に履いてきたスニーカーがそろえられている以外に荷物も何も見当たらなかつた。

「何があつたんだ…？」

記憶を辿る。

学校が終わつたその足でまた違うローカル路線に乗つて、駅で降りて、道なりに進んで写真を撮つて、それからあの洋館を見つけて、はしゃぎながら何枚も写真を撮つて、

困りましたねえ

そんな声が聞こえて振り返りうとしたら視界が暗転した…
多分意識を失つたのだろう。目覚めたらベッドに寝かされていた、
ということは誰かに連れて来られた以外にありえない。

「はあ……」

肩で溜息をつき、立ち上がって周囲を確認する。

部屋を歩き回つて確認できたのは外鍵である」とと、一枚めのドアがトイレであつたくらいだ。

そして驚いたことに部屋の壁にも窓も時計も無い。

途方にくれて、何時間経ったことだらう。

ここには最低限のものがあるしまだ腹はそこまで減らないからまだ良いのだが、荷物は何処にも見当たらぬし連絡はおろか今は何時なのかここがどこなのかさえ窺い知ることは出来ない。

このままどうなつてしまつたのだろう、という不安を抑えつけながら春人はいたしかたなくベッドの上にいるしかなかつた。

「！？」

外鍵のドアからガチャガチャと音がした。

反射的に立ち上がりつて身構える。ドアは音も無く、するりと開いた。

ドアの向こうには男がいた。

それも同性であつても眼を奪われるほど恐ろしく綺麗な青年だつた。余りにも整いすぎて逆に中性的な顔立ちに、陶磁のような白い肌。流れる金糸のような髪と青い水晶のような透き通つた色の眼。

身長はどう見ても一八〇センチはあるだろう。纏う服はどうやら黒のスーツのような仕立てだが、胸元にはネクタイではなく真紅のヒモのリボンが結ばれている。

「…初めて。ひとつお伺いしたいのですが
鼓膜に響くテノールの声に至るまで美しい。

そして青年はにこやかに微笑んだが、そこにはまるで温かみのよくなものは無く薄皮一枚で微笑んでいるかのようだ。

その雰囲気に圧倒され、ドアまで歩み寄ることが出来ない。

「は、……はい」

「橋本春人様、でしようか？」

「……そうですが」

「では不躾ながら、年齢と学年、学校名をおっしゃつていただけますか」

「……17歳、高校2年、××××高校です」

は手元のメモのようなものを見てひとつずつ確認しながら青年は頷き、確認し終わつたのかまた春人に顔を向けた。

「間違いですね……」

何のことだかさっぱりわからない春人を無視し、青年はドアの隣に呼びかけた。

一言一言会話を交わし、青年がドアから遠ざかる。入れ替わるように現れたのは青年より小さな人影。春人は言葉を失つた。

それは春人のよく知る少女だつたから。

しばらく会つていなかつたもののすぐにつかつた。

記憶にある姿よりずっと綺麗になつていたし、大人びてもいたが余り変わつていない。

彼女は春人の幼馴染にあたる少女で、小さい頃からずっと仲が良かつたのだが最近は忙しくてどちらも全く連絡を取つていなかつたのだった。

少女は黒地に青のドレスにヘッドドレス、そしてエナメルの靴を纏つていた。

フリルやレースがふんだんにあしらわれているが、上品な雰囲気のドレスは英國最盛期、ヴィクトリア朝を連想させる。

少女は俯いたまま歩み寄る。

「…マコ」

その声に、マコこと三谷野真優は春人を見上げてまっすぐにその眼を射抜いた。

「……どうして、春人？ 何でここにいるの？」

ひどく悲しそうで困りきつた声。

そんな声と視線に何と答えたら良いかわからず、春人は結局答えられなかつた。

「…どうして」

濁んだ沈黙が流れる。

どうして、と問いたいのは春人も同じだつた。

何故軟禁のごとくな状態になつていたのか。この邸は何なのか。そしてどうしてマコがあの男と一緒にここにいるのか。

どちら質問すれば良いのか更には質問して良いのかさえわからない。

沈黙を破つたのは真優だった。

「……本当に申し訳ないけれども、このまま家に帰らせるわけにはいかない」

視線を気まずそうに外す。

「え…？」

「…知られてはそのまま返すわけにいかないの」

「それって…」

真優はやはり春人から視線を逸らしたままだ。

「しばらくここに泊まつてもらいます」

「そんな」「保護者の方…お祖母様には連絡をこちらから差し上げます、今日から春休みでしょう」

春人を無視して真優は淡々と宣告していく。そんな無茶な、と怒鳴りかけた時だった。

「黙りなさい！」

有無を言わせぬ真優の声に、春人は言いかけた言葉を飲み込んで目を見開いた。

こんな風に真優から扱われたことなど春人には生まれて初めてだった。他人行儀で、全く自分の話を取り合わぬ真優など見たことが無い。

「2、3日はこのままここにいてもらいます。食事と飲み物、着替えは運ばせますからご心配なく」

呆然とする春人を置き去りにして、真優は歩み去る。

ドアの閉まる音で我に返ると、足の力が突然抜けてベッドに倒れこんだ。

ドサッ、という音が一人でいるには広すぎる部屋に反響して鼓膜に届く。

「…マコ」

どうして、という質問は当分出来そうになかった。

それから丸3日間、春人はその部屋で過ごした。

ベッドの寝心地はとてもよく、運ばれてくる食事は全て豪華な上においしかった。少しばかり量が足りないのが残念なくらいで、着替えも適当なものが一そろい運び込まれ、ベッドの傍の戸棚にはパジャマが用意してあった。

連絡をちゃんと通してくれたらしく、現在春人の保護者である祖母は了承したらしい。

食事を運んでくる無口な女性に時計を頼むと田代覚まし時計を持ってきてくれ、おかげで時刻もわかるようになつた。

そして4日目の昼。

ノックに応えるとドアが開き、入ってきたのは真優一人だった。今度は青と白のエプロンドレスを纏っている。

二人でテーブルセツトに腰掛けるが、真優は春人に視線を合わそうとしなかつた。

「不自由はしてない？」

「…おかげさまで」

しかしこれに真優は沈黙で答えた。かなり皮肉っぽく聞こえたかもしれない、と思ったがそれも仕方が無い。

「…当分帰れないのを覚悟して」

突然の宣告だつた。

「帰してあげたいけれど、あたしには春人を始末させないだけで精一杯なの」

重苦しい何かを吐き出すかのように、声は震えていた。

「始末？」「…消す、ということ」

消す、という言葉を殺す、という言葉に変換するのに時間がかかり、見上げたときには真優の表情が曇っていた。

「『めんなさい。あたしの一存では何も出来ない…』

消え入りそうな声はやはり震えて、表情はどこか泣きそうな危うさをはらんでいた。

そんな真優は春人のマコのイメージと一緒に、変わっていない、と春人は確信した。

「……なあ、マコ」

真優の顔を覗き込み、静かに問う。

「ここには何があるんだ？」

春人は、3日間頭の中でぐるぐると回っていたことを思い切って聞いた。

「ここには、何か それも誰かに知られてはならないような何かがある」という確信と、なぜそこに真優がいるのかという疑問。三谷野真優はマコのままで変わっていないかった。ならばマコはどうして、あんな態度を取つた、否取らざるを得なかつたのだろう。あんな態度を取るほど春人に対して敵意を持つたことはないし、無意味に何かをしでかすような性格でもない真優のことだ、何かがある。

真優は慎重に口を開いた。

「まだ、話すわけにはいかないけれど…」ここは、とても閉ざされた環境、なの」

「閉ざされた環境…？」

鸚鵡返しに呟いたが、真優は首を横に振つた。

「多分、もう少ししたら話す機会があると思うから。今日は、ちょっとともう」

そう言つて真優は席を立つたが、そのまま歩み去りはしなかつた。振り向かない真優の表情は春人にはわからないが。

「絶対に春人を帰してあげるから。あたしは、いつでも…春人の味方だから」「忘れないで、と。

そう言い残して真優はまた歩み去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8033f/>

星色鹿鳴館

2010年12月9日19時26分発行